

Japan
Audio
Society

JAS journal

平成29年9月1日発行
通巻448号
発行 日本オーディオ協会

2017

Vol.57 No.5

9

- ヘッドホン委員会活動報告 島 幸太郎
- 【連載：「試聴室探訪記」第34回】
～谷口ともり、魅惑のパノラマ写真の世界～
ライブハウス マックスオーディオ「音楽館」Twilight（小倉市）訪問記
谷口 ともり・森 芳久
- アナログレコード用ラッカー盤カッティング
ソニーミュージックグループとミキサーズラボが相次いで開始
見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長



一般社団法人

日本オーディオ協会



12月6日
音の日



(通巻 448 号)

2017 Vol.57 No.5 (9月号)

発行人：校條 亮治
一般社団法人 日本オーディオ協会
〒108-0074 東京都港区高輪 3-4-13
電話：03-3448-1206 FAX：03-3448-1207
Internet URL
<http://www.jas-audio.or.jp>

C O N T E N T S

- ・ヘッドホン委員会活動報告 島 幸太郎 P3
- ・連載：「試聴室探訪記」第34回】～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～
ライブハウス マックスオーディオ「音楽館」Twilight (小倉市) 訪問記
谷口 とものり・森 芳久 P7
- ・アナログレコード用ラッカー盤カッティング
ソニー・ミュージックグループとミキサーズラボが相次いで開始
見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長 P13

9月号をお届けするにあたって

すっかり空の様子も変わり、オーディオを楽しむのに絶好の季節到来かと思いましたが、予想もなかった総選挙が行われることになり、何かと騒がしい秋になりそうです。

本号では、まず協会内に昨年設置された「ヘッドホン委員会」の活動報告を、委員長の島氏にまとめていただきました。近年、オーディオ界でますます存在感を高めているヘッドホン、イヤホンのハイレゾとの関連が重要なテーマとなってきており、測定法の統一などを含めて解説頂いております。

連載の「試聴室探訪記」は、いつもと趣を変えて、北九州 小倉のオーディオの名店「マックスオーディオ」が併設する「音楽館 Twilight」で7月に催されたライブの様子取材いたしました。ホールの雰囲気や店主が集められたヴィンテージ・オーディオなどの写真と共にお愉しみいただければ幸いです。

最近、LPレコードの復活が何かと話題になっておりますが、国内でもアナログレコード用のカッティングマシンを改めて立ち上げる企業が出てまいりました。協会事務局長の照井氏がそのうちの3社を訪れ、新たに導入されたカッティング装置とその現場を訪問してまとめたレポートをお届けします。かつてLP制作に注がれた技術をレビューするような、大変興味深いレポートとなりました。

☆☆☆ 編集委員 ☆☆☆

(委員長) 君塚 雅憲 (国立科学博物館)

(委員) 穴澤 健明・稲生 眞 ((株) 永田音響設計)・遠藤 真 (NTT エレクトロニクス (株))

大久保 洋幸 ((一財) NHK エンジニアリングシステム)・高松 重治・春井 正徳 (パナソニック (株))・森 芳久
八重口 能孝 (オンキヨー&パイオニアマーケティング (株))・山内 慎一 ((株) ディーアンドエムホールディングス)・山崎 芳男 (早稲田大学)

ヘッドホン委員会活動報告

株式会社エミライ 取締役

島 幸太郎

1. はじめに

昨年より日本オーディオ協会（以下、「当協会」）内にヘッドホン委員会（以下、「当委員会」）が設立される運びとなり、僭越ながらわたくしが委員長を拝命いたしました。この度活動報告の機会を賜りましたので、当委員会設立の経緯を踏まえつつ、活動目標やこれまでの活動結果などを、以下にご報告いたします。

2. 当委員会設立の経緯

昨今のハイレゾリゾリューションオーディオ普及に伴う当協会のいわゆるハイレゾロゴにつきましては、トランスデューサー系製品としてのヘッドホン・イヤホンについても適用対象となっており、具体的な運用規定や測定方法、評価方法についても一昨年より当協会内での議論が積み重ねられてきました。

ハイレゾロゴの適用対象品目のなかでも、特にトランスデューサー系製品は信号をデジタルからアナログに変換した後の特性に関する要件が定められており、その要件として 40kHz 以上の高域を再生周波数帯域に含むことのみが公表されております。この要件の根拠についても議論のあるところですが、アナログ変換後の特性を論じることから測定方法、評価方法などの多様性という点にも特徴があり、他の製品と比べて、消費者のご理解を得るために特段丁寧な説明が求められております。

また、昨今の音響関連機器の市場規模の統計などから明らかなように、スマートフォン・タブレットに代表される携帯端末市場の活況により、音響機器全体の台数および出荷価格に占めるヘッドホン・イヤホン関連製品の構成比率が増加傾向にあります。こうした状況の変化により、新規事業として音響機器の製造販売に取り組まれ、新規に当協会に加盟された企業数も近年大幅に増加しており、これまで以上に、会員企業間の意見交換やハイレゾ対応に関する情報の共有を進める必要性が高まっておりました。

そこで、当協会として、(1) ヘッドホン・イヤホン製品に関するハイレゾ関連を含んだ消費者への情報提供を行い、(2) ヘッドホン・イヤホン製品についての当協会加盟社間での意見交換および情報共有を促進する、という観点から当委員会が設立されました。当委員会設立にあたっては副委員長としてフォスター電機／フォステクスカンパニー 山口様にご就任いただき、継続的かつ多大なるご支援をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

3. ハイレゾ対応に関する情報共有と当委員会の目標設定

当委員会が設立直後に取り組んだテーマが、ヘッドホン・イヤホン製品のハイレゾ対応に関する情報共有です。当委員会は他の委員会と異なり、長年に渡り映像・音響機器の製造販売を行う企業からだけでなく、近年新規事業として取り組む企業からも委員が出席している点に特徴があります。また、他の委員会では技術的なキャリア/バックグラウンドをお持ちの方が多い一方で、

当委員会では販売の現場に近い委員が多い点も特徴です。そのため、他の委員会では暗黙知として共有されているであろう事柄についても、改めて確認する必要がありました。

そこで、当委員会に出席する委員のハイレゾ対応機器に関する事実認識の共有や、現在の課題を共有することから始めました。特に直近の課題となるハイレゾロゴ付与に必要な要件に関する質疑応答と認識合わせに重点を置くものとなりました。

4. 当協会 Web サイトでのヘッドホン・イヤホン特設ページの検討

次に当委員会が取り組んだのが、当協会 Web サイトでのヘッドホン・イヤホン特設ページ（以下、「特設ページ」）の検討です。当委員会では、委員会初期にて交わされた意見交換の場を踏まえ、一元化した情報を公開することが必要という判断をいたしました。加えて、当委員会においては、参加いただいている会員企業が比較的多いことや、ハイレゾロゴ付製品に関する問い合わせへの速やかな対応の一助となるよう、可能な限り早期の特設ページ公開を目標として委員会活動を行うことといたしました。

また、委員会中でヘッドホン・イヤホンに関するハイレゾロゴ規定の解説を当協会として発表する必要があるのではないかといったご意見や、また当協会加盟社がハイレゾロゴ規定に関連してそれぞれにニュアンスの異なる情報を発信することによって消費者の混乱を招く状況への懸念するご意見をいただいたことから、特設ページ作成にあたっては、各社がカタログ等で当該ページを一定の様式に従い引用、紹介することを前提とした作り方を行いました。

5. ヘッドホン・イヤホン特設ページについて

ハイレゾロゴ付与の基準に関連して、特にトランスデューサー系製品については再生周波数帯域に関する基準となる数値が顕著に採り上げられています。こうした数値そのもの以上に、特にヘッドホン・イヤホン製品についてハイレゾロゴ規定を付与する意義は、共通の測定方法、判断方法および基準を踏まえた製品づくりがなされていることを示すという点で意義深いものです。

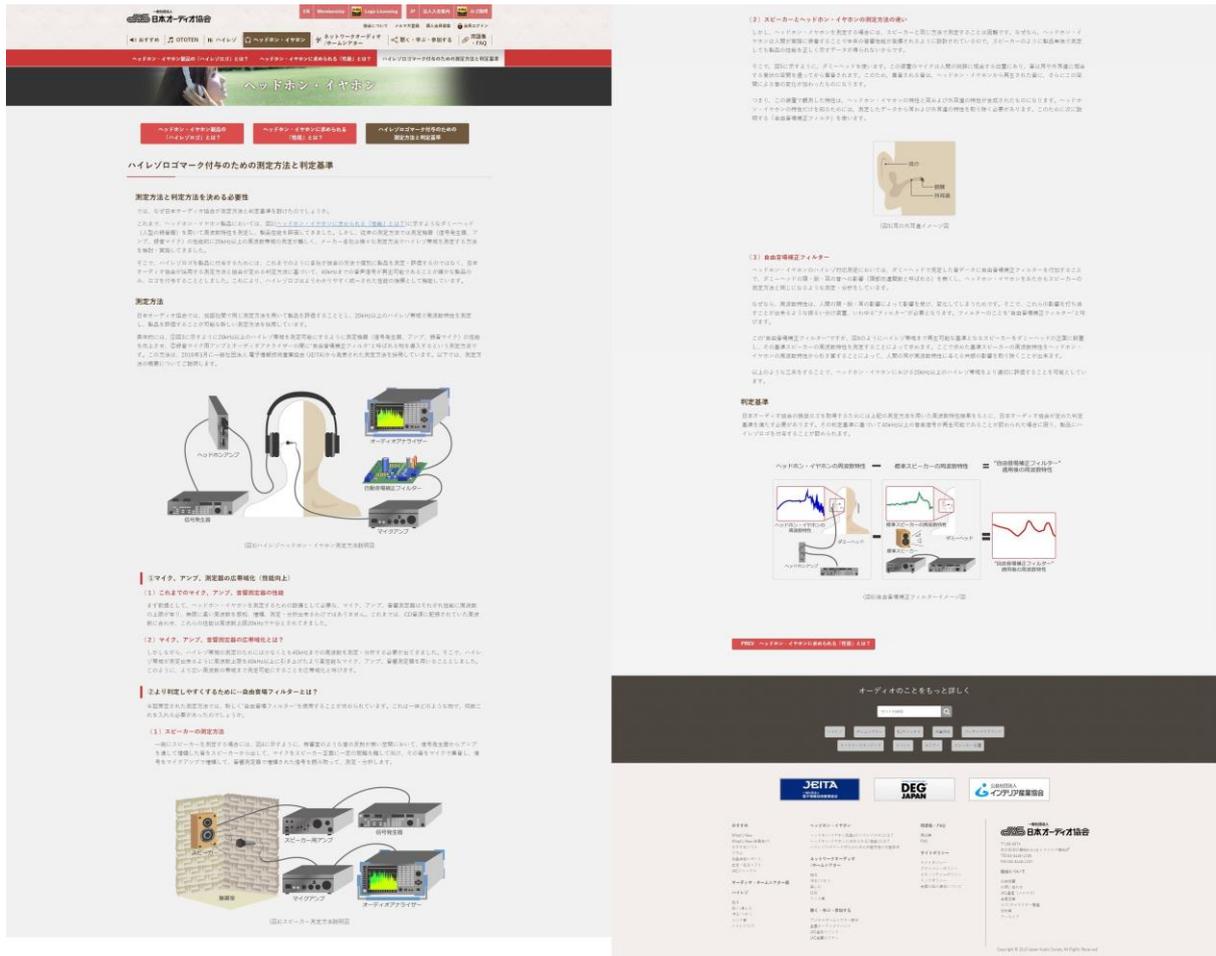
そこで、特設ページは『ヘッドホン・イヤホン製品の「ハイレゾロゴ」とは?』、『ヘッドホン・イヤホンに求められる「性能」とは?』、『ハイレゾロゴマーク付与のための測定方法と判定基準』、という3部構成とし、ハイレゾロゴ付与の意図、従来から取り組まれてきたヘッドホン・イヤホン製品の性能向上への取り組み、そしてハイレゾロゴ付与が意味する事柄について解説を加えることとしました。

当該ページの作成にあたっては、各委員の皆様から貴重なご意見をいただきましたが、特に原稿作成においてJVC ケンウッド 北川様、パナソニック 鈴木様、フォスター電機 渡邊様にご尽力いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

また、当該ページのコンテンツとして、ハイレゾロゴ規定に関連するよくある質問と回答、またハイレゾロゴが付与されたヘッドホン・イヤホン製品一覧の掲載等を将来的な目標として検討しています。

ヘッドホン・イヤホンのページはこちら

<https://www.jas-audio.or.jp/headphone-earphone>



開設ページの一例

6. 音展その他イベントでの活動

Web ページは随時更新することが本来的には重要ですが、各委員のご助力により、当該ページは今年5月に開催されました音展の前までに公開することが可能な見込みが立ちました。そこで、当該ページの告知活動を並行して実施することとしました。最初の取り組みとして、当委員会では事務局と協力し、ハイレゾロゴおよび当該ページの QR コードを印刷した配布用シールを作成し、音展にて配布いたしました。また、7月に開催されましたヘッドホン・イヤホン関連での大きな業界イベントにおいても、同様の配布を実施いたしました。今後も主要な業界イベント等で継続してシールの配布を実施し、認知度の向上に努める予定です。



7. 各種勉強会の実施

当委員会では、ハイレゾ対応以外のヘッドホン・イヤホン製品関連技術についての勉強会も適時行っています。ヘッドホン・イヤホン製品は、特にスマートフォン系チップセットの機能強化に伴って新たな技術に対応していく必要があり、従来のトランスデューサー系製品と比べてキャッチアップのスピードが求められております。当委員会では、こうした新たな技術についての勉強会等を通じて、会員企業の新製品開発の参考となる活動も行っていく予定です。

8. おわりに

当委員会は新設された委員会となりますので、今後の活動についても、各委員から提案いただきつつ検討してまいります。当協会会員企業、特に近時会員となった会員からの積極的な参加も歓迎いたします。以上で当委員会の活動報告とします。

■執筆者プロフィール

島 幸太郎

株式会社エミライ取締役。OPPO Digital Japan 株式会社マーケティング・ディレクター。コンシューマー向け音響機器、特に PC オーディオ、ネットワークオーディオ、デジタルオーディオ分野が趣味であり得意分野。各種媒体での PC オーディオ関連、ハイレゾ関連企画の監修や原稿執筆も行う。『新版 PC オーディオガイドブック』（インプレスジャパン刊）著者。

【連載：「試聴室探訪記」第34回】

～谷口ともり、魅惑のパノラマ写真の世界～

ライブハウス マックスオーディオ

「音楽館」Twilight (小倉市) 訪問記

フォトグラファー 谷口ともり・編集委員 森 芳久

今回は、九州オーディオ界にこの人ありと言われた大原晴三氏が経営するマックスオーディオ小倉店に併設された「音楽館」Twilight を訪問いたしました。

大原氏は、オーディオ・音楽はもちろん車、カメラ、室内装飾、園芸などなど多岐に亘り造詣が深い、知る人ぞ知るオーディオ界屈指の趣味人です。

もちろん本業のオーディオ店内は、オーディオファンならば初めてそこに足を踏み入れた瞬間、オーディオ全盛期の頃に戻ったような錯覚にとらわれることでしょう。思わず展示ケースや各コーナーをグルッと見渡せば、その興奮の度合いはさらに高まります。さらに奥の試聴室に入れば、この店の主が只者では無いことがはっきりします。この試聴室を観ればそこで鳴る音がおよそ想像できるほどです。例えば、まるで竹刀を抜いた瞬間に戦わずして相手の力量が判るとも言うところでしょうか。見事なものです。

オーディオファン、音楽ファンの方はチャンスがあれば是非お出かけ頂き、ここでじっくりと試聴されることをお勧めいたします。お店のベテラン社員さんが丁寧にお相手してくれることでしょう (マックスオーディオ ホームページ) <http://www.maxaudio.co.jp>。



マックスオーディオ「音楽館」Twilight

さて、今回はその試聴室ではなくマックスオーディオ小倉店の二階に併設された素晴らしい「音楽館」Twilight に於ける、去る 7 月 22 日のライブイベントでの取材です。



7 月 22 日のライブ案内チラシ

この日は写真のポスターにもありますように、福岡県を中心に幅広く活躍中のジャズドラマー乙宗亮輔と福岡県出身・在住のフルーティスト中西久美率いる i'lios のメンバーによるコラボのライブイベントです。乙宗亮輔氏はジャッキー・バイアード、中村八大、北村英治などとのライブやコンサートを共にしたベテランミュージシャン。中西久美氏は、東京藝術大学付属音楽学校、東京藝術大学卒業のフルーティストで、RKB 毎日放送アナウンサーを務めたこともある異色の音楽家です。このステージではサクソも演奏して会場を沸かせてくれました。太陽を意味する i'lios のメンバーにはボーカルの西島幸宏とピアノ國友章太郎が加わっています。



リハーサル前の音出し、マイクテスト中。まずは肩の力を抜いて

それでは今回も谷口ともり氏の迫力ある映像で「音楽館」Twilight に於ける真夏のジャズライブの雰囲気をお楽しみください。



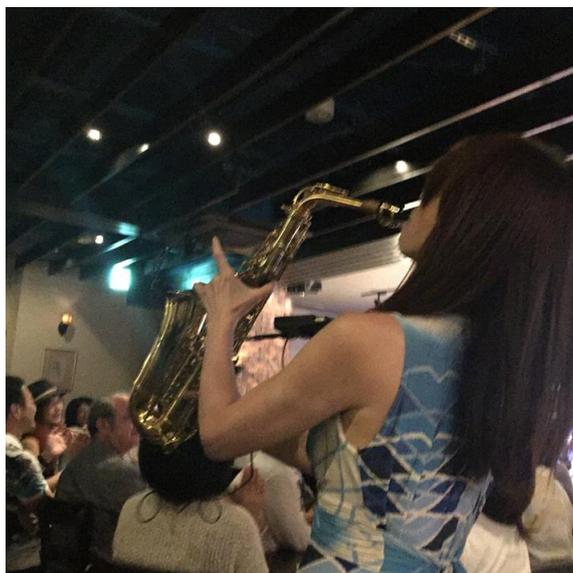
時はちょうど大暑、まだ外が明るい中でのスタートでしたが、次第にトワイライトとなり、すっかり日も落ち窓の外が闇に包まれる頃には演奏も一段と熱を帯び、舞台と観客が完全に一体となり大きな盛り上がりを見せました。

残念ながら映像は静止画ですが、それでも十分に当日の興奮を感じていただけたと思います。バックの音楽は中西久美と ilios メンバーが奏でる「トリスターザ」(中西久美の CD アルバム



会場に響くしっとりとした銀の音色

“ALL OF ME”より。お問い合わせ先:www.nakanishikumi.com)です。



ついには観客席でサックス演奏、会場の興奮は最高潮

このライブハウスには写真でもお判りのように素晴らしいバーが設えてあり、そこに並ぶお酒も大原氏のお眼鏡にかなった銘酒がそして洒落た小道具がさりげなく置かれています。客席では素敵な演奏に酔いそして美酒にも酔い、その心地よい余韻はアンコール演奏後にもいつまでも続いています。



大原晴三社長と筆者。後ろがご自慢のバー

大原社長そして出演者の皆さま、本当にありがとうございました。



音楽館の中に設置されたパラゴン他のヴィンテージオーディオ製品



大原氏のコレクションの一つである素晴らしい置物

以上の写真は全て筆者の携帯電話によるスナップ写真ですが、この音楽館の雰囲気が少しでも伝われば幸いです。

パノラマ画像の操作説明

■ パノラマ写真は、 [ここ](#)か、はじめのページ画像をクリックしてご覧ください。

(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)

■ マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。

■ 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。

+ 画面のズームイン

- 画面のズームアウト

← 画面の左移動

→ 画面の右移動

↑ 画面の上方向へ移動 画面の上方向へ移動

↓ 画面の下方向へ移動 画面の下方向へ移動

アナログレコード用ラッカー盤カッティング

ソニーミュージックグループとミキサーズラボが相次いで開始

見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長

今年2月20日ソニー・ミュージックエンタテインメント（SME）からアナログレコード用カッティングマシン導入のニュースが発信され、続けて7月にはミキサーズラボからもカッティングマシン導入による内覧会の案内が届きました。二か所からアナログレコードカッティング開始のお知らせが入ってきたわけです。

1982年に発表されたコンパクトディスク（CD）はその利便性から市場で大いに受け入れられ、またたく間にアナログレコードは姿を消していき、ほとんどの日本のレコード会社はビニール盤の発売を止めてしまったのです。その後DVD-AudioやSuper Audio CD（SA-CD）などが提案され、音楽メディアはより高音質化に向かいましたが、21世紀に入ると手軽さが先行してデジタル圧縮ファイルを小型プレーヤーで試聴するスタイルが市場を席捲しました。それでもHi-Fiマニアはハイレゾ音源ファイルを販売サイトからダウンロード入手するなど、これまで以上の高音質再生を楽しんできました。

そしてグルリと一回りしたかのようなここに来てアナログレコードの復活ニュースです。一説にはヨーロッパのロックバンドが自分たちの音楽をビニール盤でリリースし始めたことがキッカケで、国内でもミュージックフリークの間で話題になっているようです。この現象はHi-Fiを追求しているオーディオマニアにも嬉しい話題の一つで、海外のオーディオショーでもアナログレコードによる試聴が増えているというレポートもあります。最新のハイレゾ環境で制作された最新の音楽がアナログレコードで発売されるチャンスです。

今回はソニー・ミュージックスタジオ、ミキサーズラボ、そして日本コロムビアの三か所に設置されているカッティングマシンをレポートします。

ソニー・ミュージックスタジオ



ソニー・ミュージックスタジオはソニーミュージックグループのレーベルなど制作陣も入るSME乃木坂ビルの地下3つのフロアに併設されています。こういったオフィスと音楽スタジオが同居している例は世界的にも珍しく、他には有名な西海岸ロサンゼルスのカピトルレコードスタジオなどがあります。



NEUMANN（ノイマン）製のカッティングマシンはすでに製造を取りやめて久しいので、新たに導入するには中古市場で探すしかありませんが、北米からの紹介でとても程度の良い個体に巡りあったとのこと。全てを分解した状態で輸入し部品状態で徹底した洗浄を施した上で、ソニーミュージックグループの技術スタッフが自力で組み上げられたマシンは Cutting Lathe VMS70、Head SX74、Electronic Package SAL74 で、スタジオの一角に専用スペースが新たに作られ収まっていました。



ここに据え付けられたカッティングマシンの特徴は駆動方法にあるのではないのでしょうか。筐体底面近くに収められたモーターはNEUMANNが出荷したままのオリジナルで、およそ1mのシャフトで天面に備わるプラッターに直付けされています。これまで国内で稼働していたVMS70マシンのほとんどは駆動機構がダイレクトドライブ方式モーターに交換されていました。



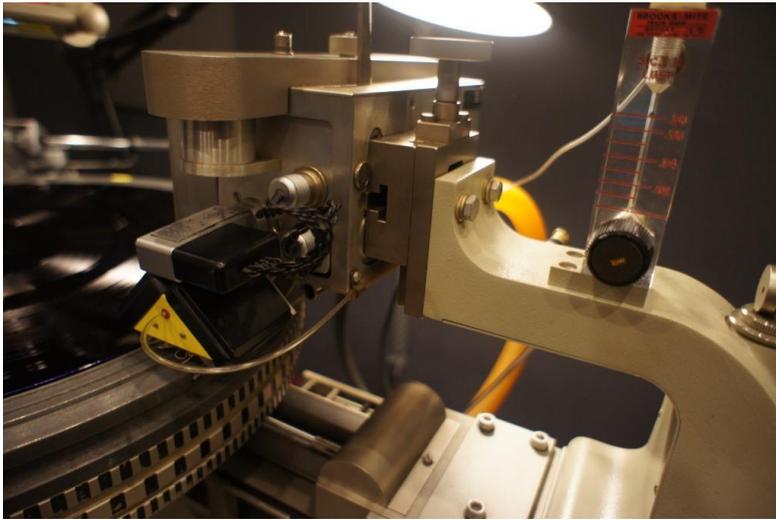
巨大なプラッターの裏側を覗くと回転系のベアリングへの注油口が金管楽器のマウスピースのように見えますが、回転検出用のランプも軸の後方（写真の向こう側）に取り付けられています。モーターの持つトルクではこの重量級のプラッターを始動させるにはあまりに非力で、オペレーターが作業の度に手回しで始動する必要があります。



プラッター天面には回転方向にいくつも溝があり、さらにはその中には空気穴が点々と見えています。ラッカー盤を圧着させるためのバキューム機構で、軸の左手に半円C字状の中に小さなレバー（手前側にポツンと見える）があり、ラッカー盤の大きさに従ってバキューム範囲を選んで空気の経路を切り替えます。



プラッター軸に上から差し込まれたバキューム用のパイプ。ラッカー盤を装填したのち降ろされる。プラッターの奥には検聴用のトーンアーム SME 3012が見え、ピックアップカートリッジは定番の DENON DL-103 が付いています。



ラッカー盤のカッティング作業を終えオリジナルポジションに居る黄色い三角マークが目印の Cutting Head SX74。オデコから延びる白いチューブは写真右上に縦長に見えるクリア筒に接続されて、ここには冷却用ヘリウムガスの送出量を調整する黒いノブも見えます。

奥の黄色いホースは切カス吸い取り経路（ドレイン）用。



マシンのコントロールボード中央のメーター（LPI）はカッティング溝間隔を設定するもので、インチ表示仕様。メーター下にはカッティングする盤の大きさ指定スイッチが見え、右側列には回転スピード 16 2/3、22 1/2、33 1/3、45 から選択可能です、ハーフスピード製作にも対応していることが判ります。

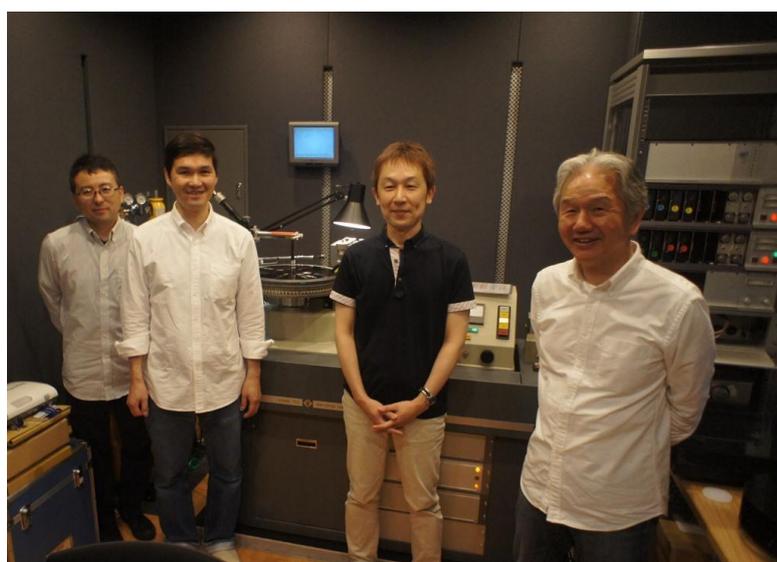


カッティングされたラッカー盤の状態を検視する。顕微鏡から直接視ることも可能で、このように取り付けられたカメラ映像からモニターでも確認できます。写真中央には二本の溝が密着したように走る様子が判る NG の例。音楽信号が大きくなる場合カッティングヘッドの送りスピードを速くしてこういった溝接近のケースを未然に防ぎます。



上左の写真は信号系のラック Electronic Package SAL74 のケース中を見たところ。青、黄、緑、赤のシールが見える八つのボードがカッティングヘッドをドライブするパワーアンプ部。上右の写真はそのうちの一枚でキャンタイプのパワートランジスタ（3 平行）が使われており、二組の増幅回路をブリッジ接続する仕様でチャンネルあたり 600W もの大パワーを供給しています。

ソニー・ミュージックスタジオはスタジオ躯体全体を浮かした完全防振構造で、カッティングマシンはこの躯体上に大量のコンクリートを投入して直接設置されており、30~50Hz 付近の聴こえる低域ノイズから数 Hz と行った極低域まで万全の対応とのことです。



お話しを伺ったスタッフのみなさん。株式会社 ソニー・ミュージックコミュニケーションズ
ソニー・ミュージックスタジオ
スタジオカンパニー スタジオ
オフィス（写真右から）

次長 宮田信吾さん
テクニカル・ルーム
アシスタント・マネージャー
野口素誠さん
マスタリング・ルーム
堀内寿哉さん
テクニカル・ルーム
大倉伸矢さん

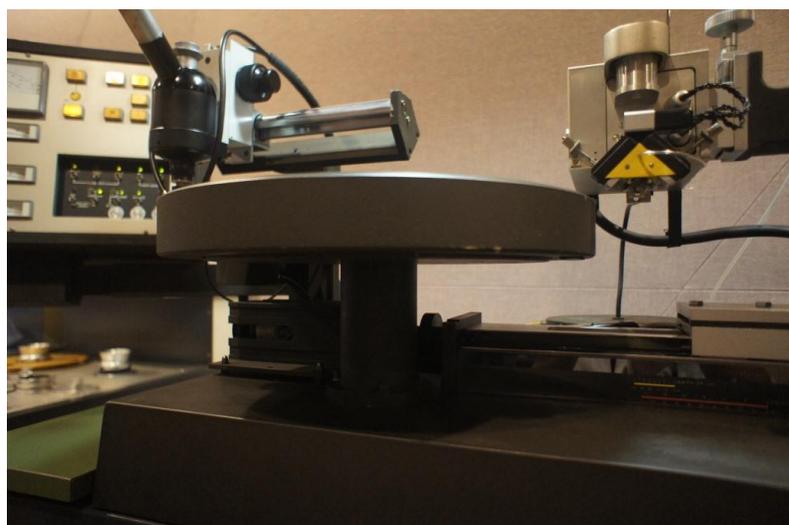
ミキサーズラボ



ミキサーズラボでは数年前からアナログカッティングの構想を温めていたものの、肝心のマシンに目処が立たないため保留になっていたところ、北米からの連絡で急ぎ会社方針を整え、今年の大連休GW明けに一気に準備を進めたとのこと。訪れたところは元々CD マスタリング作業の専用ルームであったスペースを改造してカッティングマシンを導入したということで、少し広めのスペースが充てられていました。



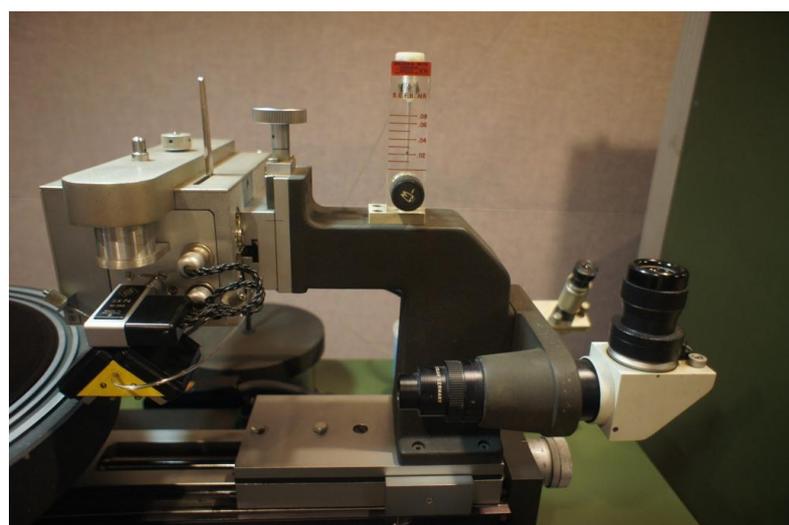
写真は Cutting Lathe VMS80、Head SX74、Electronic Package SAL74 で、VMS70 と比較してマシン本体がコンパクトなことと操作ボードの違いが目につきます。床の黒い部分はフローリング材が切りとられており建物構造体に直結設置されています。VMS80 は本体と旋盤間に振動防止構造があり直接は固定されておらず、従ってマシンの設置場所にさほど神経質になる必要がないようです。



VMS80 に装備されたプラッターは VMS70 にあったようなストロボ文様が無くシンプルで、外形サイズも一回り小さくなっております。これはオリジナルの駆動用モーターがダイレクトドライブ方式に変更された最大の利点のようです。



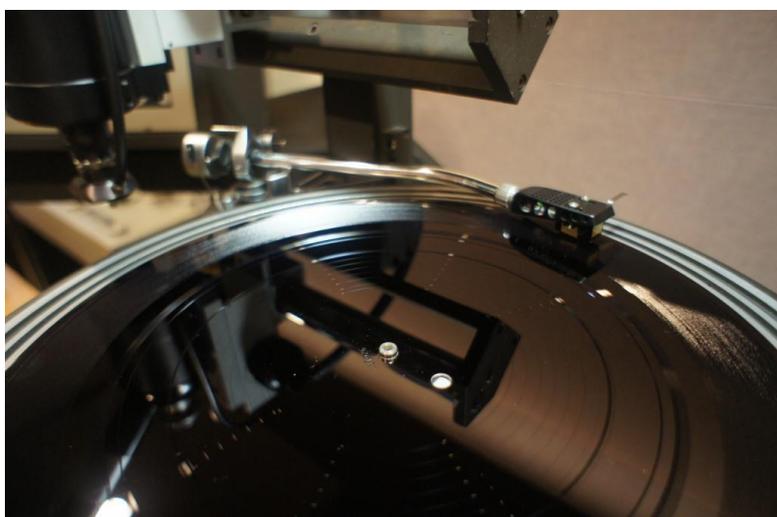
また、ラッカー盤を圧着するためのバキューム機構も空気の通り道がプラッター軸内に収まっているため、更に外観がスマートに見えています。プラッター天面の模様やラッカー盤のサイズ指定の切り替え機構も違うことが見てとれます。



カッターヘッドは黄色が目印の SX74 で、ヘリウムの送出機構も VMS70 と同じものが付いていました。カッティングヘッドユニット全体の送り機構は、真下に横方向に設置された丸棒に細かなウォームギアが切られており、その回転でスムーズに移動させる仕組みになっています。



VMS80 のコントロールボード部分。マシンは日本への売却が決まってから北米のエンジニアによるフルメンテナンスが施されたということで、ここに見えるパネルも非常に綺麗な状態でした。ラッカー盤サイズ指定がセンチメートル表記なのが面白いです。



試しカッティングしたラッカー盤を試聴する様子。表面はまるで鏡のようで映り込みも美しいですね。試聴アームは VMS70 では SME3012 であったところ、ここでは SME3010 が見てとれますので、プラッターの小型化もよく解ります。



ラッカー盤は国内長野県にあるパブリックレコード会社製のほか、APOLLO 社、TRANSCO 社製などを取り寄せて検討を進めているとのことでした。

写真には Cutter Head SX74 ダイヤモンド針付の予備パッケージが見えます。予備パーツがあるのはこの時期には大変貴重な財産です。



持ち込まれるマスター音源再生用 STUDER A80。テープパスは先行ヘッドと 0.9 秒後 (33 1/3 回転) に再生ヘッドが位置する機構になっておりアイドル、テンションアーム、ブリークアームなどがいくつも並んでいるのが見えます。

ミキサーズラボではアナログディスクカッティング再開にあたってはレコード全盛時代と同じ製作スタイルにこだわりたいと STUDER は勿論のこと、NEUMANN 社オリジナルコンソールも同時に設置できたことは大変重要なことと語ってくれました。



下の写真は組立作業に駆け付けた北米エンジニアとスタッフの皆さん。作業終了後風景です。

(写真手前左から)

北村勝敏さん

菊地 功さん

Crisu Muth さん

Atsushi 小杉さん

(写真中列左から)

加藤拓也さん

高城 賢さん

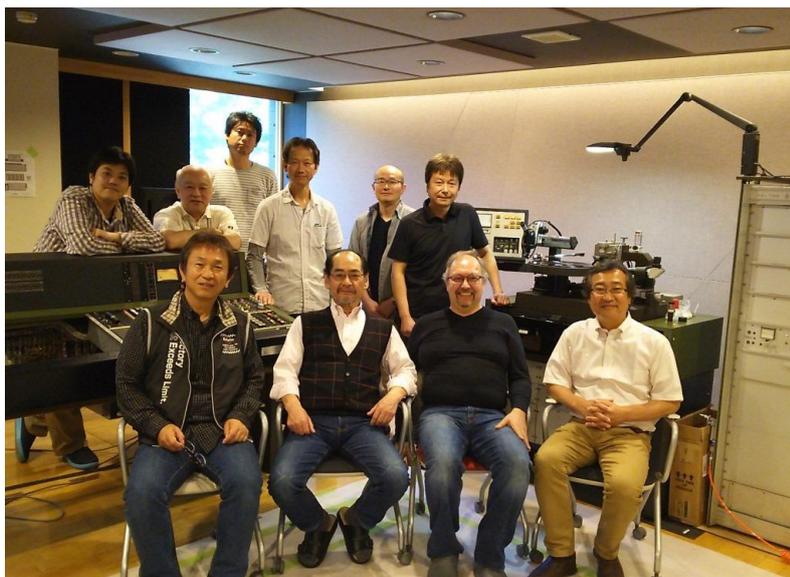
田中龍一さん

小池裕之さん

(写真最後列)

山口 雄さん

松永健司さん



日本コロムビア



明治 43 年に株式会社日本蓄音器商会としてスタートし、昭和 21 年に日本コロムビア株式会社へと社名変更、AV・メディア関連機器部門を株式会社デノンとして分社化・譲渡などの変遷を経て、音楽事業母体は現在に至っております。昭和 40 年には赤坂の小路をコロムビア通りと呼ぶに至るきっかけとなった音楽スタジオを完成させ、また多摩川沿い港町駅近くにあった工場屋根の、真っ赤なコロムビアネオンサインの輝きを記憶されていらっしゃる方も多い

ことと思います。日本初のアナログ LP レコードを発売したのもこの会社の大きな功績でした。



写真は Cutting Lathe VMS70、Head SX74、Electronic Package SAL74 で、一番の特徴は VMS70 の駆動モーターが DENON 製に交換装着されている点でしょう。



DENON ブランドとしてカッティングマシン用モーター AU-169/AU-170 を日本オーディオ・フェアに参考出品したのが 1979 年と資料にあります。

「トルクむらの少ないアウトローター形 AC3 相モーター、磁気ヘッドを用いた検出回路、クォーツロックサーボ等の採用により、カッティングシステム用モーターとして十分な性能が得られています。」参考出品

DENON 資料から引用



プラッター裏に光るランプは NEUMANN オリジナルの回転検出用。その内側に黒い帯がリング状に見えるところが回転検出用信号の磁気コーティング部で、180 度の対向で検出ヘッドが二つと、その中心部には 21 極コイル仕様ローターの収まるケースの輝きが見えます。



調整用コンソールも自社開発のカスタム機を運用しており、イコライザーやコンプレッサーといった機器は左手のラックに整然と収められています。



このカッティングルームでもアナログテレコ STU-
DER A80 が常備されており、写真
は 1/4 インチ仕様機ですがこの
ほか 1/2 インチ仕様機や
A820 も倉庫で休んでいます。
余談ですがアナログテレコは
16トラック機や 24トラック機
も現役稼働で、過去の録音素材
をデジタル音源化するなどの作
業も、別スペースで進められて
いました。



会社の音楽事業の長い歴史を
過去にさかのぼると、主に 78
回転で楽しんでいた SP レコー
ドの盛んなった時代に触れるこ
とになります。同社ではシエラ
ック盤でリリースされた音源の
金属原盤も大切に保管している
とのことでした。



今回の取材でご対応頂きました日本
コロムビア（株）スタジオ技術部の
皆さん。

（写真左から）

スタジオ技術部長 冬木 真吾さん

アーカイビング課長 斉藤 徹さん

チーフカッティングエンジニア
武沢 茂さん

PCM 録音機の開発者で会社 OB の
山本 薫さん

チーフマスタリングエンジニア
田林 正弘さん

ソニーミュージックグループではこのところのアナログレコードブームのため、各制作セクションからのカットインが依頼が増大しての今回のマシン導入ということで、持ち込まれた音源はPCM DAW（デジタルオーディオワークステーション）に一旦取り込み、先ほどの写真にあったような問題点を予見しながら信号調整を行い、カットイン作業に臨むとのこと。また、90年頃までは盛んにアナログカットイン作業を行って来た証拠（？）としてカットイン用先行ヘッド付 STUDER テレコも倉庫に眠っているようで、ひそかに出番を待っているのではないのでしょうか。カットインマシンを設置したスペースはビッグバンドオーケストラ編成も録られるスタジオと同じフロアですので、条件が整えばダイレクトカットイン収録も可能です。いつか実施して頂きたいと考えるのは私一人ではないと思います。

ミキサーズラボのカットインマシン導入時の組立は、日米エンジニア合同作業でほんの数日で仕上げられたとのことで、そのスピードに驚きます。持ち込まれる音素材は、新譜ではハイレゾのデジタルファイルがメインとのことで、ここでも 192kHz/24bit にも対応した DAW が活躍します。お披露目イベントでは、DAW の再生音とラッカー盤カットインの再生音の聴き比べも行われ、参加者は息をのむ思いで試聴に立ち会っていました。また、今回の取材時にはこのマシンでカットインされた LP レコード（ビニール盤）を VMS80 レーサーで再生して頂き、モニター用 GENELEC の大型 W ウーファー仕様スピーカーから、最高に贅沢な再生音を堪能させて頂くことができました。

日本コロムビアは赤坂を撤退した 2005 年からほんの少しの期間だけ作業を止めたものの、頑なにアナログサウンドを守り続けている一貫したポリシーを感じ取らせて頂きました。ご紹介しました金属原盤をはじめとして、レコード盤のみならずゼンマイ式蓄音機に至るまで、音の遺産として沢山のアイテムを大切に保管しているとのこと。取材後半にはこれら貴重な音楽遺産の中から、蓄音機の奏でる豊かなカラーレーションの再生音を、何枚もなんまいも聴かせて頂き、すっかり時間の経過を忘れて長居してしまいました。また、聴かせてください。

アナログがブーム、と簡単に書き綴ってしまいましたが、しっかりメンテナンスされた装置で聴く LP レコード・ビニール盤は、アーティストが時空を超えて手の届く処まで来てくれる素晴らしい世界ですね。今週末もアナログレコードをゆっくり聴こ〜っと。